徒然譚

校歌の思い出

旧職員　小川　保

昭和三年の秋、私が赴任した頃は、まだ校歌が制定されては居なかった。たゞ

今宵にこぼれて
またたく星は

という女学生向きな歌詞の応援歌が、北大の寮歌として知られている

豊かにみのれる
石狩の野に

の曲を借用して、盛んに歌われていたようである。運動会各部対抗、行軍、遠足、などと言う場合には、雄大な感じのうちに感傷的なひびきを含むこの曲が、何時頃からか解らないが私の赴任以前からずっと愛唱されていたらしく、あらゆる機会に生徒の士気を鼓舞する歌声となって高らかにひびくのであった。作詞者が誰であるか今ではハッキリしていないが、多分、何時の間にか文学好きな生徒によって作られたものらしい。

伊藤校長から校歌の作詞を依頼されたのはその年の暮れか翌四年の春早々のことだったと記憶している。伊藤校長からは、特に商工両科の一体化をもり込むようにと希望があり、生徒側からは高田中学の校歌に比べて見おとりのしない雄大さと、元気さを織り込んで欲しいとの要望があったりして、まだ若い血の気の多かった私は早速暇を見ては構想にとりかゝったわけである。

当時、高田中学と商工学校とは互に野球の好敵手同士だったし、春秋二季の定期試合は全市をあげてファンを二分し、まさに高田での早慶戦と言った伝統的な人気の焦点でもあった。

お互いに学校あげての応援団を繰り出し、その若い熱狂振りは全くグランドを圧して息づまるものがあった。グランドは交替で、自校のホームグランドに迎撃したり、或は敵陣営に出撃したりして、その度毎に物々しい応援団の示威も真剣なものであった。

しかし、堂々の一千の大勢を擁して、

妙高山はして峨々として
千古の白雪天を衝き

と言う中学校の校歌斉唱に対抗して、僅々五百足らずの商工軍が声をはりあげて歌う応援歌

今宵にこぼれて
またたく星は

ではそのメロディーが感傷的なせいもあって、やゝもすれば圧倒され勝ちであった。

私が赴任して間も無い十月初旬、中学校のグランドで秋の定期戦が行われ、私はその試合光景を見て、商工軍のつゝましやかな戦い振りに訳もなくいじらしさで胸の熱くなるものを感じたのである。

たしか、その時の投手は五年生の岩崎直一郎君、捕手は四年生の来海正元君、一塁手は二年生の村山一郎君だったように覚えている。

くわしい試合の情勢は忘れてしまったが、九回裏のドタン場で守るは商工、最後の攻撃に懸命な中学、何でもスコアは僅かの差で商工リード、中学に一撃されゝば忽ち逆転の危機、二死直後の攻防は秋の陽が沈みかけ、あたりに夕闇が迫り、応援団の応酬にも一種のすご味をさえ加えて熱狂する中で、ガッチリした体躯の来海捕手が全軍を引きしめて号令するのに引きかえマウンド上の岩崎投手は、きゃしゃな長身に水のような冷静さをたゝえて、その左腕から繰り出す一球一球はいよいよさえ、バッターから忽ちストライク二つを奪い、最後の一球を投ずべく捕手と慎重なサインがかわされていた瞬間、一塁側中学の応援団から怒涛のような投手牽制のわめき声が押しかぶさって来たのである。だが次の瞬間、岩崎投手の細い左腕から繰り出された得意のインドロは、バッターの物すごい空振りとなって万事終わり忽ち商工軍に起る勝どきとなり、選手を囲む例の応援歌が、夕闇を圧してとゞろくのであった。

この往年の来海捕手は市内に、村山一塁手は三年生から捕手となり、今では高田商工高校の教官として、何れも健在なのに、好漢岩崎投手は遂に若くして逝去されてしまった。

このはつらつたる少年たちのいぶきに感動していた私は、思い切って、
　アルプス連峰、そびらに負いて

の一節を冒頭として、書き起こす気になったのである。ところが、この「アルプス連峰」の字句は作詞完成後、恩師の山田孝雄博士に校閲を乞うた時、頭から怒鳴りつけられ、「アルプスは欧羅巴にあるのに、何ごとだ」と言うわけ、そうしてこのような卑屈な日本人の考え方は、慨嘆にたえないと言うのが、国粋学者山田先生の意見であった。だが
「日本アルプスというのを略してアルプスと一般に呼んでいるのだから、別に欧羅巴崇拝の意味はない」と、弁明これ努めた結果、漸く了解を得て、校閲を承諾して貰ったのである。

こんないきさつもあって、四章からなる校歌々詞が出来上ったのだが、今にして思えば用語の上でも、難解なものが少なくないが、読むのが目的ではなく、曲によって歌い、耳で聞いて心にひびきを与えるのだから、音韻の流暢なもの格調の高いものであるようにと、苦心したのであるが、たゞ若さで一気に歌いあげた点で、それらが補われているかもしれない。

その頃、長崎高校出身の南里英治という快男児の先生がいた。野球部長として選手の指導監督にも、熱血を注ぐ真剣さで、まことに驚くべき生徒思いでもあった。一面音楽をも愛好する純情家で、或いは若い頃、音楽志望の夢を持っていたかも知れないと想像される程、音楽に対する素質も豊かな先生であった。

校歌の作曲に関しては、この南里先生が熱心に心配して呉れ、
「音楽学校の梁田教授にたのみましょう」と言って、早速依頼してくれたのも忘れられない。南里先生は、私のまだ在校の頃退職して、鉱山事業に転身、色々と苦心されたようだが成功を見ずして、不遇のうちに病没されたと仄聞しているが、私は今でも先生から贈られた庭球ラケットを秘蔵している。

梁田教授は千葉県の出身なので、名前はかねがね知っているが、面識はない。どんな関係からかは知らないが、南里先生はよく知っていたので、南里先生を介して依頼状が出されたわけである。梁田先生は当時、衰えてゆくオルガン科の主任教授として、孤独を守る節義の高い武士のように音楽の一筋を歩んでいた人、その作曲には幾多の名曲があることは、周知の通りである。「城ヶ島の雨」の曲も先生の手になったもの。私の歌詞が故南里先生のお力添えによって、はからずも同郷先輩の名曲を得たことは、私の生涯のよろこびである。

また「蓬笳」という語の出典などに関しても、納得の行くまで極めて置こうと考え、山田博士その他の先生方に質問したが釈然とせず、最後に新田聖山先生の博識によって、鼓笛、角笛の意を明かにすることが出来、私も安心して使用することが出来たのである。

その新田聖山先生は、自ら新田義貞の正統と称する漢学者で、その頃の新田子爵家は傍系にすぎないと主張する孤高の風格床しい先生であったが、先生もすでに故人となってしまった。

言葉は時代と共に生きるものであり、時代が変遷すれば意志、感情を表現する言葉というものも、おのずから変わってゆくのが、当然の成り行きなのである。

今から二十六年前に作った校歌の表現語句が、漢字制限の今日において、今の若い人たちにはピッタリしない点もあることゝ想像される。だが、そうした半面には、校運と共に、長い年月を経るにつれて、歴史精神が浸み込み、伝統が積み重なり、高田商業高校としての特質、特長が成り立っていくのであるから、言わば、それだけさびのついて来たところに、精神が伝承されているのである。

終戦後、何年目かに幸田先生からの便りで、校歌が今でも歌われていることを知った時、戦災で「死んだとばかり思っていた愛児が無事だ」と知らされたような、驚きと喜びを感じたのである。

この度、四十周年記念式に臨んだ時、昔と少しも変わらない坊主頭の生徒諸君が、力強く斉唱する校歌を聞き入った感慨は、何物にも替え難い思いであった。

あの温厚寡黙な伊藤校長、少しもくったくの無い快男児南里先生、両先生ともすでに世になく、私が今も頑健にして、仙台の片隅に生きていることは、何だか、不思議なような気もするのである。

教育者として歩んだその足跡は、そう長くは残っていないで多少の風雨を経過すれば、すぐ消えてしまうかも知れない。だが足跡が消えてあとかたがなくなっても、歩んだと言う事実は、永久に消えることのない事実なのである。

私の印した在校七年余の足跡はもう消えてしまったが、はからずも残した一篇の校歌が、今も学校と共に生きていることは、私にとって望外の名誉だと考えている。そして、次々と本校に学ぶ若い世代の人々が、声高らかに歌うそのひびきのあふれるところ、常に本校の精神が、絶えることなく清らかに流れるようにと念じてペンを置きたい。

（創立記念誌寄稿より）

＜関係者紹介＞

山田 孝雄（やまだ よしお、1873 年（明治 6 年）5 月 10 日（実際には 1875 年（明治 8 年）8 月 20 日）- 1958 年（昭和 33 年）11 月 20 日）は、日本の国語学者、国文学者、歴史学者。
独学の人として知られる。「契沖、真淵、宣長以来の国学の伝統に連なる最後の国学者」とも評される。

梁田 貞（やなだ ただし〈てい〉、1885 年〈明治 18 年〉7 月 3 日- 1959 年〈昭和 34 年〉5 月 9 日）は教育者、作曲家。北海道札幌区（現・札幌市中央区）出身。
代表作に、『城ヶ島の雨』（作詞北原白秋）、『どんぐりころころ』（作詞青木存義）

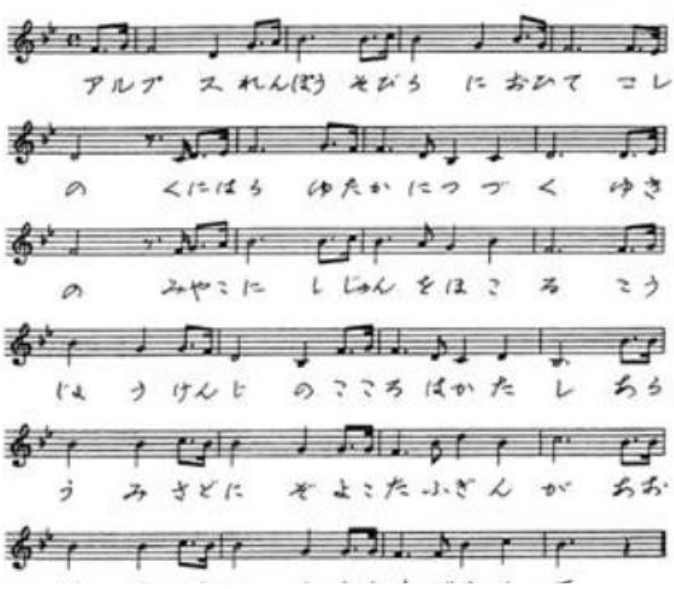
出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

新潟県立高田商業高等学校校歌

本校教諭　小川（おがわ）　保（たもつ）　作詞
文学博士　山田（やまだ）　孝雄（よしお）　校閲
東京音楽学校教授　梁田（やなだ）　貞（ただし）　作曲

1．アルプス連峰（れんぽう）　背（そびら）に負（お）ひて
越（こし）の国原（くにはら）　豊（ゆたか）につゞく
雪（ゆき）の都（みやこ）に　至純（しじゅん）を誇（ほこ）る
鮫城建兒（かうじょうけんじ）の　精神（こころ）は堅実（かた）し
荒海佐渡（あらうみさど）にぞ　横（よこ）たふ銀河（ぎんが）
仰（あお）げば燦（かがや）く　吾等（われら）が前途（ゆくて）

2．紫（むらさき）かげろふ　春日（かすが）の山（やま）に
萌（も）ゆる八千草（やちぐさ）　嘶（いなゝ）く駿馬（しゅんめ）
若（わか）き城主（じょうしゅ）の　高鳴（たかな）る血潮（ちしお）
橡尾（とちお）の勝鬨（かちどき）　先（ま）づ世（よ）を靡（なび）け
千曲（ちくま）の流（なが）れに　威名（いめい）を伝（つた）ふ
霜台公（そうたいこう）こそ　吾等（われら）が亀鑑（かがみ）

3．黎明（れいめい）薩筑（りゅうか）は　衢（ちまた）にひゞき
啓示（けいじ）の光（ひかり）も　影（かげ）いと清（きよ）く
不撓（ふとう）の大旆（たいはい）　久遠（くおん）の理想（りそう）
剛健素朴（ごうけんそぼく）の　楯振（たてふ）り翳（かざ）し
建設（たて）なん　東洋商業日本（とうようしょうぎょうにほん）
祖国（そこく）の礎（いしずえ）　吾等（われら）が使命（つとめ）

4．六華（りくくわ）を象（かたど）る　高潔（けだか）き校章（しるし）
「業（わざ）」の一文字（ひともじ）　不斷（ふだん）の錬磨（れんま）
大瀛（だいえい）空撃（そらう）つ　波（なみ）すさぶとも
繚乱（りょうらん）吹雪（ふぶき）の　風（かぜ）しまくとも
建設（たて）なん　東洋商業日本（とうようしょうぎょうにほん）
図南（となん）の翼（つばさ）ぞ　吾等（われら）が抱負（のぞみ）